

MieHerstory

News Letter No.11

三重の女性史研究会

三重の女性史研究会会報・第11号
2012年1月12日発行
編集：三重の女性史研究会事務局
〒514-1133 津市久居万町638-2 佐藤方
TEL&FAX 059-255-7813
✉ mie-her09@jewel.ocn.ne.jp
発行：三重の女性史研究会

2011年11月21日(月)

行ってきました! 2011秋のフィールドワーク
~北勢地域の女性先駆者を訪ねて(その1)~

治田鉱山跡入口
(青川峡キャン
ピングパーク)
にて

午前には治田鉱山のおまき・五代アイの足跡を訪ねて治田鉱山跡入口(いなべ市北勢町青川峡キャンピングパーク)へ、午後は駒木根りうの足跡を訪ねて桑名市の海蔵寺・立教小学校・顕本寺へ出掛けました。

当日いなべ市には二重の虹が掛かり、一同その影を追いながら、充実したフィールドワークとなりました。

藤原岳付近の鉱山について

木下 弓子



今回、治田鉱山の女山師の足跡をめぐる現地訪問が楽しかった。小嶋千鶴子氏の著書「あしあとII」(43頁)によれば、ジャスコの先祖もこの付近の出自とあり、こう書かれている。「徳川時代に員弁の丹生川の銅山開発を徳川から仰せつかる。ところが銅がとれなくなってしまって食べられなくなる。それで藤原村の山の奥の奥の所に住んでいたのを、一族の一人が四日市に来て天秤棒を担いで三滝川の沿岸をずっと商いをする。」とある。鈴鹿山脈の麓に住む私は、岐阜まで306号線経由の通勤途中、この奥は銅山だったのだと思いながら川幅狭い丹生川を渡っていたので、今回小さな銅の原石を手にして感慨深かった。またこの辺りはしょっちゅう時雨れて虹をよく見る。会員の皆様が道中ずっと付きまとっていた(?)虹に大変感動していたのも、いつも見慣れている私には新鮮な体験だった。(ちなみに新年2日にも見ました!)

屋敷跡に立ちたい

竹内 令

おまきさん・アイさんの歩いた道を歩きたかった。屋敷跡に立って、彼女たちが目にした風景を、この目に収めなかったのだが…。

先日、北勢町に住む大学時代の同窓生に“いつか案内を”と手紙で頼んだ。それまでの辛抱。五月の同窓会で、工事の進捗状況も聞けるだろう。足が弱らないようにしなくっちゃ。

音楽科の学生たち20名ほどで楽団を編成、県南部の中学を中心に演奏旅行を実施したのは、大学3年(S28)の夏だった。紀州鉱山からも招聘を受け、次の日に鉱山内部を案内してもらった。女性3名の内、地下に潜ったのは私だけ。他の二人は尻込みしたのだ。

「昔は、女性はいれなかったんだけど」

案内者は、私が混じっているのに驚いて、そう言った。地下深くエレベーターで降り、トロッキに乗って坑道を走った。

あの頃アイさんは、75歳か76歳。もう引退していたに違いないが、銀・銅産出の夢は持ち続けていたことだろう。

駒木根りうと立教百年誌

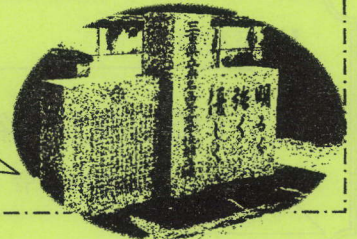
佐藤 ゆかり

フィールドワーク3回目にして、現地とのコーディネートも初担当になった。訪問先でお世話になった方々には、不慣れな分、何かとご迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、各地で本当に充実した説明をいただいたこと感謝申し上げます。

桑名で訪問した駒木根りうに縁のある立教小学校は、最初訪問を予定していなかったが、私が教員時代の初任地でもあったため、だめもとで電話をかけたところ、偶然にも校長先生が当時の先輩で、直前にも関わらず快く見学を受け入れてもらった。当日出向くと書庫からこれでもかと付箋を付けた『立教百年誌』を出してこられた。発行年を見れば勤務していた頃にも確かにあったはずだが、恥ずかしながら私には初見だった。しかしこれを契機に、眠っていた駒木根りうの歴史が、再び日の目を見たことは本当によかった。『三重の女性史』や研究会の活動をきっかけに、女性史が学校現場に少しでも活用していただければと思う。

渡辺真澄様(いなべ市教育委員会生涯学習課)、西羽晃様(くわな歴史と文学を語る会)、佐藤隆様(桑名市立立教小学校校長)はじめ各地でお世話になった皆様方、大変ありがとうございました。

桑名高等女学校
創立地碑(桑名
市立立教小学校
東)





フレンテみえ「みえの男女2011」公募展示 「今ここで生きる私—三重の女性と「移動」—」 多数のご来場ありがとうございました 2011.11.12(土)

2011年11月12日(土)三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」にて、男女共同参画フォーラム「みえの男女2011」が開催されました。今年三重の女性史研究会は公募展示で参加。「今ここで生きる私—三重の女性と「移動」—」と題し、パネル展示をしました。

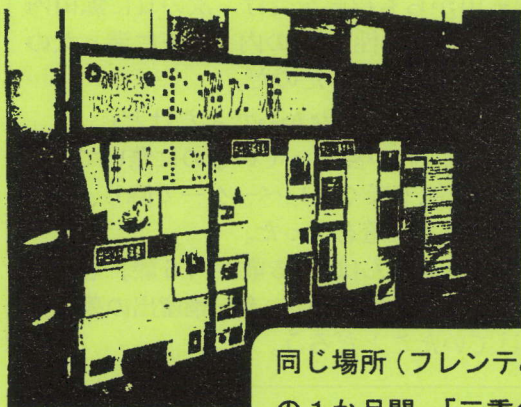
三重出身で全国・海外で活躍した女性(伊東里き・河井道・井出ひろ・森三千代)、他県出身で三重で活躍した女性(根本貞路・堀川恵つ・石田マサヲ)、働くための県内の移動(遊女・農繁期出稼ぎ・行商・奉公と修行)、海外で働いた三重の女性(出稼ぎ海女・満洲移民)、三重に働きにきた女性((東亜紡泊工場・近江絹糸津工場紡績女子工員)を取り上げ、新たな調査も加えそれぞれ展示しました。



【展示「まとめ」より】

移動を繰り返した女性は、地域女性史の記録からこぼれやすい。しかしだからこそ、各地の地道な調査、ネットワークの駆使で、あちこちに散らばっている史料・証言等を丹念に拾い上げ、まとめあげなければならない。その作業は、果てしなく時間と労力を要するが、反面、果てしなく面白くもある。

また移動は女性を強くする。例えば転勤など男性の移動は同一環境の延長線上にあることが多いが、女性の移動は全くゼロからのスタートとなることも少なくない。あたかも植物の種が見知らぬ土地に舞い降り、今まで生きてきた土壌とは全く違うところで、より広くより深くより強く根を張り、環境に適応して生き抜こうとするように—移動をするごとに、女性はより強くなっていくのではないだろうか。



同じ場所(フレンテみえ 1F ふれあいコーナー前)で、11月29日(火)~12月25日(日)の1か月間、「三重の女性史研究会アンコール展示」を開催しました。「移動」のほか、各地で好評だった井出ひろ・佐々木かよ・山高しげりのパネルを週替わりで展示しました。

【読書案内】

『^{ことすが}倭訓栞』と谷川士清

竹内 令 著

当会副会長で「谷川士清の会」会員でもある竹内令が、『倭訓栞』と谷川士清を刊行しました。士清のことが、本年4月から光村中学3年国語教科書に掲載されたとのこと。本書には、士清の業績を探究しわかりやすく著した「近代的国語辞典の祖 谷川士清」ほかの収録です。

三重の女医先駆者

～「三重県初の女医」調査チーム～

『日本女医史』（日本女医会 1962 年）では、まず江戸期の女医として伊勢出身の度会園（斯波園女）を取り上げている。東京女子医専創立者吉岡弥生の長男吉岡博人が、1933（昭和 8）年研究論文「日本女医史の研究（四）」で詳細に報告したことが大きなきっかけだろうが、『日本女医史』がまず三重の女医を取り上げているのは喜ばしいことである。（度会園については『俳諧師園女の生涯』（ジャンポール絹子 2000 年）が出ている。）

ところで、『三重の女性史』（フレンテみえ 2009 年）に取り上げられた主な女医は以下のとおりである。

【『三重の女性史』に取り上げられた主な女医・女性医学博士】

名前	地域	掲載ページ	主な時代	免許	備考
度会 園	伊勢	244	江戸	—	眼科医 俳人
高島 式部	松坂	257	江戸	—	針医 歌人
富山 靖子	伊賀	37・53	明治	明治 39	医術開業試験以降県内初の女医
富山 正子	伊賀	37・53	大正	大正 3	靖子の従妹
城 薫子	伊賀	37・54	大正	大正 3	旧姓久保
井出 ひろ	白山	37・245	昭和	大正 8	産婦人科 女性で日本 2 番目の医学博士
児玉 琴枝	尾鷲	39・245	昭和	大正 8	眼科 婦選運動 日本婦人有権者同盟杉並支部
大西 末子	北牟婁	40	昭和	大正 13	婦選獲得同盟会員
藤井 稔	尾鷲	37・98	昭和	昭和 3	旧姓森田 戦後初の衆院選立候補
近澤 喜代子	関	153	昭和		町議会議員 三重婦人クラブ
坂下 栄	津	222	昭和		医学博士 合成洗剤研究 消費者運動

ところが最近、顧問の西川洋先生から大きな情報が寄せられた。「伊勢新聞」明治 29 年 11 月の記事に「富洲原村の吉岡つる子が医術開業試験に及第し本県女子初」という内容があったというのだ。それは『三重の女性史』で県内初とされていた富山靖子より 10 年も前のことである。そこで明治 22～25 年の『三重縣衛生年報附録 醫師姓名録』を調べてみると父親吉岡嘉三郎の名前が確認できた。それだけでなく別の地域に「平田けい」という女性らしき名も発見できた。そこで暫定的に表を下のように追加してみた。

名前	地域	掲載ページ	主な時代	免許	備考
平田 けい	稲生		明治	—	産科医
吉岡 つる子	富洲原		明治	明治 29	富田一色

これが、高島式部と富山靖子の間に入ることになる。しかし、この 2 名の女医についてはまだまだ情報不足なので、読者の皆様の情報、特に当該地域の方々の情報を、三重の女性史研究会事務局までお知らせいただければ幸いです。もちろん、上表の 11 名についてもご存知のことがあれば知らせていただければと思う。

只今チームを作って調査中です。乞うご期待!!
情報お待ちしております。



男女役割分担意識の ルーツを探る

—古事記の中の女と男—

竹内 令

はじめに—1 昨年のレポートは、テーマを「女性史に見る 男は仕事 女は家庭 のルーツを探る」とし、

- ① 高等女学校（女子中等学校）関連の文部省令
- ② 県内高等女学校の設立状況
- ③ 県内高等女学校の設立趣旨・規則等
- ④ 県内高等女学校の校歌

と、4つの観点から迫った。

その結果、明治中ごろの日本社会、殊に公家・武家階層からなる上流社会には、「男は仕事 女は家庭」の強固な枠組みが既に存在していたことが見てとれた。しかも女子中等学校（女学校）は、高い教育を受けた男子に娶^{めあ}わせる女性の育成を目的に設立されたものだったから、上流社会に行き渡っていた枠組みを、より堅固なものにしたと思われる。また、女子の進学率が増すに従って、「男は仕事 女は家庭」は、女学校の教育を通じて、日本社会に広く深く浸透していった、との結論に達した。

今回は一気に遡って、日本最古の古典『古事記』の中から、役割分担意識のルーツを探ってみよう。

I、古事記の成立とその背景

壬申の乱を平定した天武天皇は、各地の氏族が所有する記録は自家を有利にするため虚偽を加えていると聞き、正しい帝紀を選録して後世に伝えようとし、川嶋皇子以下十二名にその作成を命じた（天武記 10 年、681 年）。また自らも撰録を進め、舎人・稗田阿礼に誦習を命じる。しかし天武天皇の崩御で、この企ては未完成（原古事記）に終わった。

30 年後の和銅 4 年（711）、元明天皇（女帝 天智の皇女 天武、持統の皇子・草壁の妃）は太安萬侶に、阿礼誦習ノ帝紀の完成を命じる。上・中・下三巻の帝紀（『古事記』）が完成したのは、翌和銅 5 年（712）だった。

各地の言い伝えを加味し、皇室家の皇統と事蹟を中心とした書『古事記』は、古語・古意によって古代を語った、文学性の高い書である。

上つ巻……序、神代の時代

中つ巻……神武天皇から応神天皇まで

下つ巻……仁徳天皇から推古天皇まで

II、神代の時代（上つ巻）の女と男

- ① 伊耶那美（女神）と伊耶那岐（男神）

天上の神々から「ただよへる国を修理^{おさ}め固め成せ」と命じられた二神は、天の浮橋に立って、賜った天の沼矛^{ぬぼこ}を刺し下し、搔き混ぜ、滴り落ちる塩で淤能碁呂嶋^{おのころしま}を作る。

<原文> その嶋に天降りまして、天の御柱を見立て、千尋殿を見立てたまひき。ここに、その妹伊耶那美の命に問ひて、

「なが身はいかにか成れる」

と曰らししかば、

「あが身は、成り成りて成り合はざる処一処あり」

と答へ白しき。しかして、伊耶那岐の命の詔らししく、

「あが身は、成り成りて成り余れる処一処あり。かれ、このあが身の成り余れる処をもちて、なが身の成り合わざる処に刺し塞ぎて、国土を生み成さむとおもふ。生むこといかに」

伊耶那美の命の答へ曰ししく、

「しか善けむ」

しかして、伊耶那岐の命の詔らししく、

「しからば、あとなこの天の御柱を歩き廻り逢ひて、みとのまぐはひせむ」

と、かく期^{ちぎ}りて、すなはち

「なは右より廻り逢へ。あは左より廻り逢はむ」

と詔らし、約り竟へて廻る時に、伊耶那美の命先づ、

「あなにやし、えをとこを」

と言ひ、後に伊耶那岐の命

「あなにやし、えをとめを」

と言ひ、おのおのおも言ひ竟へし後に、その妹に告げて、

「女人の言先ちしは良くあらず」

と曰らしき。しかれども、くみどに興して生みたまへる子は、水蛭^{ひるこ}子。この子は葦舟に入れて流し去^うてき。次に、淡嶋を生みたまひき。こも子の例^{たぐひ}には入れず。

ここに、二柱の神議^{はか}りて言ひしく、

「今、わが生める子良くあらず。なほ天つ神の御所^{みもと}に白すべし」

といひて、すなはち共に参上^{まいのぼ}り、天つ神の命を請ひたまひき。しかして、天つ神の命もちて、ふとまにに卜相^{うらな}ひて詔らししく、

「女の言先^{ことさきだ}ちしによりて良くあらず。また、還り降り改め言へ」

かれしかして、返り降りまして、さらにその天の御柱を往き廻りたまふこと先のごとし。

ここに、伊耶那岐の命先づ、

「あなにやし、えをとめを」

と言ひ、後に妹伊耶那美の命

「あなにやし、えをとこを」

と言ひき。かく言ひ竟へて、御合ひまして生みたまへる子は、淡道之穂之狭別の嶋（淡路島）。次に……

こうして伊耶那美と伊耶那岐の二神は次々に日本列島を生んでいくのだが、女性が男性より先に発言することを禁じたこのくだりは、男性が主、女性が従という思想が、この当時、既に日本に存在していたことの証しであろう。また当時すでに、右より左の方が上位という思想が存在した中で、男神が左回りをしている。

この2点は、日本の上古からある思想だろうか、それとも、当時すでに国交を持っていた東アジア諸国から流入したものだろうか。いずれにしても、男女役割分担意識の源流に近付いた思いがする。

シアトル『大北日報』と市川房枝

佐藤 ゆかり (2011年12月末・記す)

12月、愛知教育大学附属図書館「市川房枝没後30周年記念企画展」に出かけた。な、なんと私の酔っ払い防止法の論文(「酔っ払い防止法」の再評価とその限界—ドメスティック・バイオレンス、セクシュアル・ハラスメントの概念がなかった時代に—)が展示に反映されていた。しかも市川房枝のDVD『八十七歳の青春』が大きく映写されている真横に。嬉しさに思わず長居をしてしまった。

そこには『市川房枝自伝・戦前編』(1974年/以下『自伝』)も展示されていた。正直その分厚さに、いつも必要な箇所のみ読み状態だったのだが、この時改めて最初からページをめくってみた。と、あるページで手が止まった。市川がアメリカの婦人運動を学ぶため渡米したことは知っていたが、上陸したのはシアトルで、しかも1921年だったとは。これは井出ひろの夫・欽一が、シアトルで医院開業した頃ではなかったか。私は、今からちょうど1年前に出会って今年1年すっかりお世話になったシアトル日系邦字新聞『大北日報』を、年末また紐解くことになった。(この辺の経緯は、会報『MieHerstory』7号や、三重の女性史研究会フレンテまつり2011ワークショップ『海を渡った三重の女性たち—資料集—』掲載「シアトルと井出ひろ」をご覧ください。)

マイクロを繰っていくと、さっそく出てきた。『大北日報』1921年8月15日鹿嶋丸(鹿島丸)入港の乗船名簿の二等の欄に「東京・市川房枝」の名前。続いて17日には初対面のインタビュー記事。さらに18日からは「新婦人協会について」のタイトルで、市川の名で7回の連載を見つけた。市川は『自伝』に、シアトルの邦字新聞を『大陸新報』と書いていたが、これは彼女の記憶違いで、正しくは『大北日報』だったのだ。もっとも市川は、『女性同盟』1922年1月号「米国よりシヤートルにて」や、『婦人展望』1970年4月号「新婦人協会創立五十周年を記念して(7)」には『大北日報』と正しく記しており、両誌「(新婦人協会の)初めからの事を七回に亘って書きました」「七回に亘って運動の大要を寄稿した」との記述と、『大北日報』の実際の連載記事は符合している。

さて『大北日報』8月15日記事によれば、鹿嶋丸は13日午後10時にシアトル港に入港した。二等船客だったため移民館に留め置かれたことは『自伝』にも「米国よりシヤートルにて」にも書いている。そして『婦人画報』8月号・10月号の「監獄と言われる米国の移民館に這入って」(1924年/『市川房枝集』第1巻再掲)には、「一人の女」「Aさん」と三人称ではあるが、この時の自らの状況をより詳細に記述している。ここに面会に来た1人が、大北日報の記者だった。『婦人画報』には「△△新聞社のM氏」とあるが、大北日報記事では「山縣さん」とあり、この山縣記者が市川の担当となったようである。9月下旬から市川はバンクーバーに赴くが、数日後山縣記者も社用で同市に向かっている。(『自伝』には市川のバンクーバー行きは「シアトルの新聞記者の斎藤氏に勧められて(中略)一緒に訪問」とあるが、この斎藤氏が山縣記者と同一人物なのか別人なのかは今のところ不明である。)またこの山縣記者が書いたと思われる実際の8月17日インタビュー記事であるが、タイトルは「新婦人協会の牛耳を握り新しい女の爲に赤かい氣を吐きつゝある市川房枝女史の談」。婦人運動をする女性たちに対する揶揄的な常套句が、ここシアトルの日系紙にもしっかり貼り付いていた。

ところで、市川は同年7月新婦人協会の役員を辞任し渡米している。同会の活動に疲弊し、一旦のリセット、休養、充電の意味も大いにあったと考えられる。市川の役員辞任後、新婦人協会もう一方の平塚らいてうは『女性同盟』1921年7月号「第一回總會に臨み過去一年半を回想しつゝ」や、『婦人公論』1923年3~7月号掲載「新婦人協会の回顧」で市川に対する不満を綴っている。市川は『自伝』の中で、『女性同盟』1921年7月号は渡米前には見ていないとし、「新婦人協会の回顧」については渡米中に友人から「あなたの悪口」として知らされたと綴っている。よってシアトル上陸直後には、これら平塚が書いたものに対する反論という形は取りえないにせよ、市川は相手への不満や批判を文章に残していないのか。特に日本から遠く離れた異国での新聞に、積もり積もった本音が出てしまったということはないだろうか。そうした観点で私は、この「大北日報」8月18日からの市川の手による連載記

事「新婦人協会について」(一)～(七)を読んでみた。7回を通して、新婦人協会の目的や経過を述べるとともに、当時伝えられていた協会解散説や平塚引退説を第1回から否定している。そして最終回冒頭でもこのように述べている。

「協会の現状は以上述べました様で最近伝えられた協会の解散説は全然事実無根で御座います。尚同時に伝えられた平塚氏の引退説も相違致して居ります。尤も現在の会の組織が前に述べました様になりましたから自然平塚氏は今迄程に表面には立たれないかも知れませんがさうなれば或いは郊外に住居を移されるといふ事も起るかも知れないとは思いますが。現在では氏は矢張従前通り協会の柱石としてその発展に尽力しておられます。(後略)」(『大北日報』1921年8月26日)

市川は、平塚の引退説に関して一応の否定はしているが、協会の解散説に対する否定ほど強いものではないように読み取れる。また後半は、平塚の体調や事情等を慮っての表現とも取れるが、読みによっては今後の平塚の引退を匂わすような書きぶりでもある。さらに「米国よりシヤトルにて」の市川の筆によれば「新聞紙は別便を以て御送りしましたから御覧下さいませ」とあるから、この記事が平塚が目にした可能性も出てくる。平塚がその記事を読んだのか、読んだのならばそれが平塚にどのような影響を与えたのか、特に平塚の連載「新婦人協会の回顧」の内容に影響を与えたのか、現時点では不明である。(しかしその後、平塚一家が療養のため郊外を転々としたことは事実である。)

結局、『大北日報』記事の中に、市川房枝シアトル滞在中の井出欽一との接点は見つけることができなかった。しかし市川のシアトルでの動きはある程度追うことができた。『自伝』に「講演会にも引っ張り出された」とあるが、これは9月19日夜、実業倶楽部月次会の中で行われた。会員以外も参加でき、会費は75セント(婦人無料)。演題は「日本に於ける婦人参政権運動に就いて」だった。また『自伝』に現地小学校3年生のクラスで英語を学んだことが描かれていたが、『大北日報』9月14日に「外国人の爲に小学校にて＝特に英語を教ゆ＝」の記事がある。直接市川のことは書かれていない。しかし、以前からあったシステムに市川も乗っかっての「入学」だったのか、市川の事例が契機となって募集が始まったのかは不明だが、具体的な小学校2校の名前を挙げて紹介されている。

ところで『自伝』では、バンクーバー訪問の後、シアトルに戻りスクール・ガールをしているように書かれているが、実際にはバンクーバーはシカゴ行きの直前である。スクール・ガールをして資金を貯めてから、バンクーバーやシカゴへ向かったとする方が自然だろう。またシカゴ行きについて、『自伝』では「もちろんひとりでグレート・ノーザン鉄道」とあるが、『大北日報』10月11日記事では「ミルウォーキー線にて(中略)当市の築野市蔵氏も商用にて紐育に赴く為に女史と同行」とあり相違がある。記事によれば10月11日朝9時半、市川はシアトルを列車で出発。翌12日夜9時過ぎ、香取丸でシアトル港に到着したのが、矢島楫子と守屋東である。『読売新聞』1921年12月8日記事(『市川房枝集』第1巻再掲)に「先生、シヤトルで会いたかったねと仰有った市川房枝さんです」と書かれているのには、このようなタッチの差が裏に隠れていたのである。

そしてその記事が出た(時差を無視すれば)わずか4日後、『大北日報』は1921年12月12日「にほんきんしん(日本近信)」欄に、「雷鳥女史に代って奥うめを夫人」と題して新婦人協会に関する日本からの情報を掲載しているのである。アメリカでは前年婦人参政権が成立し、シアトルにも初の婦人市議会議員が誕生しようとしていた。そんな時期、シアトルの日系人にとって祖国日本の新しい婦人運動は、非常に興味を持つ動きだったのではないだろうか。

*

こうして“酔っ払い”に続き、また市川房枝の“落ち穂拾い”をしてしまった。そして『自伝』はまだつまみ読み状態である。市川生誕の地・濃尾平野日光川のちょっと下流生まれの女子としては、かなり恥ずかしいのだが。・・・続きは期待しないでくださいませ。

*

ところで、名古屋市女性会館が事業仕分けどおり廃止となってしまうたら、図書室入ってすぐのガラスケースの中の市川房枝貴重資料はどうなるのだろう。また同館には『三重の女性史』調査時に活用した三重県にはない『婦人展望』バックナンバーほか貴重資料が数多くある。同館は名古屋市だけの財産ではなく広く東海の財産だと、今、声を大にして言いたい。

募集!!

「三重の女性史」感想文



皆様の感想を
お待ちしております♥

私たちが調査研究し完成した『三重の女性史』刊行から2年余りが経ちました。この本を皆様にどう読んでいただいているのか、どう活用していただいているのか、私たちは大変興味を持っています。

そこで県内外、男女問わず広く感想をいただけたらと思います。ご意見・ご感想等を下記の要領でぜひお寄せください。（『三重の女性史』は県内各図書館や各都道府県男女共同参画センター等に 있습니다。）皆様の多数のご感想をお待ちしております。



対象：どなたでも（県内外、男女、会員外・会員、年齢など問いません）

字数：400～1600字程度

締切：2012年2月末日（必着）

原稿送付先：三重の女性史研究会事務局あて（表紙に記載）

（郵送・FAX・メールいずれの方法でも結構です）

その他：お寄せいただいた原稿は、三重の女性史研究会で選考の上、順次会報に掲載させていただきます。応募多数の場合等、すべての感想文を掲載できないこともあることをご承知置きください。なお原稿はお返しいたしませんので、あらかじめコピー等をお取りいただければと思います。

**ご参加
お待ちしております**

**三重の女性史
いよいよ
わあむ津に**

歴史を拓いた 津の女性たち

in 津市男女共同参画フォーラム「わあむ津」



1. とき：2012年2月11日（土・祝）
2. ところ：津市リージョンプラザ
3. 内容：活動発表（10：00～11：45）活動展示（10：00～16：30）
4. 紹介する津の女性たち（予定）：
中村美知子、関よね、濱田滋子、堀川恵つ、三重保育院、生活改良普及員、井出ひろ、山高しげり、佐々木かよ、根本貞路、近江絹糸女子工員（順不同）
5. 主催：三重の女性史研究会

（三重の女性史研究会の津市在住のメンバーを中心に発表します）

～お誘い合わせのうえ、ぜひ、お越しください。～

☆三重の女性史研究会では、皆さまからの情報提供や、出前講座のお申し込みを受け付けております。ご連絡・お問い合わせ等は、三重の女性史研究会事務局（表紙に記載）までお気軽にどうぞ（^-^）☆

☆今号初めて、8ページでお届けできました。いかがだったでしょうか。三重の女性史研究会は、今年も皆様にさまざまな情報をお届けできるように頑張っていきます。よろしく願いいたします。☆